

大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第49号

大阪市史料調査会（編集）
大阪府立中央図書館内 TEL06-6539-3333

●楠木父子と大阪の川・橋

楠木正成は、鎌倉時代の終わりごろから南北朝時代のはじめにかけて活躍した武士として知られています。正成は、鎌倉幕府や足利尊氏の軍勢と何度も合戦をしました。その戦場としては、1331年（元弘元）9月に鎌倉幕府に対して挙兵した、正成の本拠である河内国の赤坂城・千早城（千早赤阪村）や、1336年（建武3・延元元）5月に足利尊氏・直義^{ただよし}の軍勢に敗れて正成の最期の地となった摂津湊川（神戸市中央区）が有名です。いずれも、ちょうど河内国の南端と摂津国の西端にあたりますが、大阪市域にも正成が駆け抜けた足跡は残っています。

正成は最初の挙兵で幕府軍に敗れてしばらく身を潜めたのち、1332年（正慶元・元弘2）12月頃に再び挙兵します。紀伊国から河内国に入り、そのまま摂津国へと北上した楠木軍は、1333年（正慶2・元弘3）正月に四天王寺一带で京都の六波羅探題から派遣された幕府の軍勢と衝突します。六波羅軍は、楠木軍に敗れ、そのまま四天王寺から淀川（現在の大川）にかかっていた渡辺橋まで逃げ延びます。しかし、正成の軍勢の追撃によって六波羅軍の将兵の多くが橋の上から転落したという話が、南北朝時代の軍記物語『太平記』に載っています。ちなみに渡辺橋は現在もかかっていますが、当時の渡辺橋は現在とは場所が違っており、天神橋と天満橋の間にあっただと考えられています。

『太平記』は、この渡辺橋での楠木正成と六波羅軍との合戦から14年後の1347年（貞和3・正平2）11月に、正成の子の正行も同じように、合戦で渡辺橋に追い詰めた敵を橋の上から落としたという話を載せています。



小楠公義戦之跡 大阪市中央区天満橋
昭和15年に楠木正行の敵兵救助の逸話をもとに建立された碑

楠木正行は、父の正成が死んだあと、後醍醐天皇が吉野に開いた南朝で父のかわりを務めました。1347年8月に父正成と同じく紀伊国で挙兵し、11月にかけて、河内から摂津へと軍勢を進めます。そして、遠里小野（住吉区）で室町幕府軍と激戦を繰り広げ、打ち負かしました。このとき、正行軍に負けた幕府軍は、かつて六波羅軍が正成軍に追われたときと同じように、渡辺橋まで追い込まれ、やはり同じ運命をたどりしました。しかし、正行は、川へと落ちた将兵を救出するという意外な行動にできました。川の水に浸かって寒さで震える者には衣服を与え、傷を負った者には薬を与え

て治療を施し、敵陣へと帰しました。この正行の情け深い行為を恩義に感じた兵たちは、正行に仕えたいと考え、翌1348年（貞和4・正平3）正月の四條 畷合戦^{しじょうなわて}で正行たちとともに討ち死にしたといひます。

また、『太平記』には、正行の弟の正儀^{まさのり}も1361年（康安元・正平16）7月の中津川（現淀川）・神崎川一帯の幕府軍との戦いで、打ち負かして川に落ちた敵兵を救助したというエピソードがあります。正成が渡辺橋一帯で幕府軍と戦ったという事実は、同時代の史料から確認できますが、正行・正儀のそれについては後世に作られた『太平記』にしかみえません。したがって、あまりにも似通った正行・正儀のエピソードのいずれかは、『太平記』の創作であった可能性も否定できません。

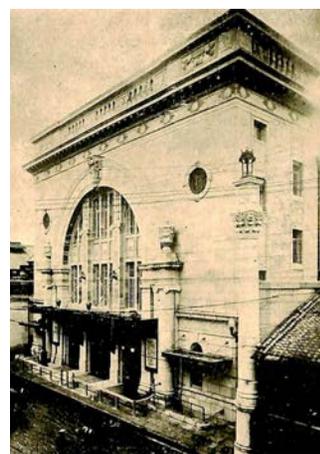
しかし、例え創作であったとしても、『太平記』の作者は、当時の大阪市域における楠木父子の戦いは、橋の上から敵を落とす、川に落ちた敵兵を救うというのが最大の見せ場だという認識を持っていたからこそ生まれたエピソードといえます。それは逆に『太平記』の読み手にも作者と共通の理解があったからこそ、成り立っていたといえるでしょう。（生駒孝臣）

● 繁華街のコンクリート建築

大阪“ミナミ”の繁華街に洋画専門の映画館松竹座が竣工したのは、1923年（大正12）1月のことでした。松竹座の構造には、最先端の本格的な耐震耐火構造が用いられていました。同座は、基礎や床、屋根すべてが鉄筋コンクリートで造られ、柱や梁には鉄骨鉄筋コンクリートが使われていました。

松竹座の東側には大阪を代表する劇場街東西櫓町があり、道頓堀五座と呼ばれた5つの劇場が軒を連ねていました。浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座です。しかしこれら5つの劇場は、まだ建物の一部分を除いてほとんどが木造でした。松竹座は、他の劇場にさきがけてコンクリート造の映画館として誕生したのです。

松竹座の建築を皮切りに、1920年代以降、ミナミの繁華街の商店や飲食店のなかに、鉄筋コンクリート造のビルディングが建築され



竣工時の松竹座
（『松竹座建築概要』松竹合名社刊、1923年5月、大阪市史編纂所蔵）



昭和10年代の道頓堀夜景
松竹アドビル（中央）、せきぐち料理店（左端）
（大阪市史編纂所蔵）

はじめました。浪花座の西隣にあった料理屋丸万は1929年（昭和4）に、角座の前にあった牛肉料理のせきぐち料理店は1934年（昭和9）に、戎橋南詰東側にあった松竹アドビル（現在のかに道楽）は1935年（昭和10）頃に竣工しました。松竹アドビルには、バーや喫茶店、麻雀クラブなどが入っていました。夜になると、ビルの全面を覆うネオンの広告がきらめいていました。

角座と朝日座の間にあった石川呉服店は、街の近代化に伴って外観を大きく変えた商店でした。同店は、維新前には両替商を営んでいましたが、明治維新以降当主の石川友右衛門が洋反物小売商を始めました。明治期の石川呉服店の写真を見ると、軒の低い昔ながらの家屋に、「石川洋反物店」の看板がかけられているのがわかります。石川呉服店は、大正初期に本店を拡張しました。次頁の写真を見ると、ショーウィンドウを備えた洋風の店構えになり、看板には「石川友右衛門呉服店」の文字の右隣には「DRY GOODS STORE」の文字が並んでいることがわかります。さらに同店は、1928年（昭和3）秋にタイル張りの鉄筋コンクリート造に改築され、外装のみならず内装もモ



ショーウィンドウを備えた石川呉服店
（『新名所新世界』大阪土地建物株式会社刊、
1913年、大阪市史編纂所蔵）



終戦直後の中座付近（大阪市史編纂所蔵）

ダンな商店になりました。

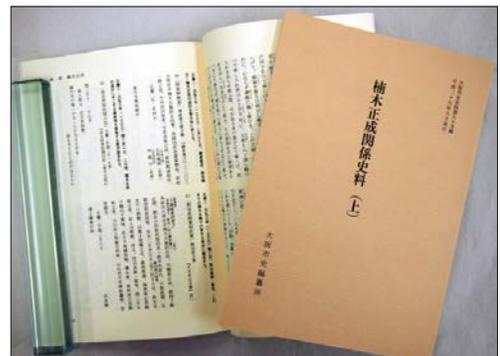
道頓堀から少し南に下った千日前には、鉄筋コンクリート造の劇場や映画館が建ち始めました。常磐座（1931年）、大阪歌舞伎座（1932年）、大阪劇場（1933年）です。1936年（昭和11）には、大阪歌舞伎座の西に5階建の鉄筋コンクリート造のレストラン北極星が建てられました。北極星を運営していたパンヤの食堂は、堂島や船場の平野町、新世界、阿波座など、大阪各地に20軒の支店を持っていました。

難波から道頓堀川にかけての一带は、南地五花街と呼ばれた歓楽街であり、小さな木造の貸座敷や飲食店、商店などが密集して建てられていた地域でした。1920年代から30年代にかけて木造家屋の町並の中に、ところどころ鉄筋コンクリート造の建物が建っていったのです。1945年（昭和20）3月に第一次大阪大空襲が起ると、木造家屋はことごとく焼夷弾によって焼き払われました。ところが、鉄筋コンクリート造の建物は焼け残り、空襲直後には片付けに戻ってきたひとや家を失ったひとの一時的な寝床になったのです。（相良真理子）

◆ 新刊のご案内

『大阪市史史料 第85輯 楠木正成関係史料（上）』

南北朝時代の武士楠木正成、正行・正儀父子は、大阪市域を含めた近畿一带を駆け巡りました。本史料集は、楠木正成・正行の生涯と大阪市域に留まらない彼らの活動の軌跡を、同時代の古文書・古記録・軍記物語等からたどったものです。本書をもとに、後世の伝承や言説にとらわれない、正成・正行の実像を追究してみてください。



【お詫びと修正】

『編纂所だより』第45号の「絵はがきでみる昔の大阪（23）」で、タイトルを「西成大橋（明治41年12月竣工）」としましたが、絵はがきの「（大阪名所）西成大橋」が間違っていました。この写真は淀川大橋でした。「淀川大橋（大正15年竣工）」に修正します。

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（市立中央図書館3階市史編纂所内・電話06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店：ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）、旭屋書店（天王寺MIO店）、
紀伊國屋書店（梅田本店）※『大阪の歴史』のみ取扱い

絵はがきでみる昔の大阪（27）

住吉大社北祭の船渡御（明治時代末から大正4年）

この絵はがきのタイトルは「官幣大社住吉神社北祭船渡御長狭ノ浦御船」となっています。官幣大社とは、明治4年（1871）に定められたもので、歴代皇室が尊崇した神社および、天皇や功臣を祀った神社で、宮内省から神饌幣帛料しんせんぺいはくりょうなどが授けられたのです。この制度は戦後廃止されていますが、戦前建てられた「官幣大社」とか「別格官幣大社」などの石柱が残っているのを見かけることもあります。

さて、住吉大社はいろいろな神事・祭礼が伝えられていますが、長い歴史の中で、廃絶されたものもあります。北祭もその1つです。明治以前にも毎年9月晦日に行われていましたが、明治以後は、明治7年（1874）松島に行宮あんぐうが造られて、そこに船渡御するようになりました。しかし、明治18年（1885）の臨時祭以後は中絶してしまいます。

ところが、明治30年（1897）に築港事業が始まると、松島行宮が注目されるようになったのか、明治33年（1900）には松島行宮で臨時祭典が行われ、明治36年（1903）に築港大栈橋が竣工したときに、築港大栈橋を経て松島行宮への船渡御が行われました。その後松島行宮は取り払われるのですが、築港への船渡御は大正4年（1915）まで続き、それ以後廃絶します。この絵はがきはその北祭の船渡御を写した貴重なものといえるでしょう。なお、タイトルの中にある「長狭ノ浦」は「長峽ながおの浦」の間違いです。住吉のあたりは古代には長峽と言われていたのです。

（堀田暁生）



★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。

http://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 または「大阪市史」で検索してください。

今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。また、この「編纂所だより」のカラー版の閲覧とダウンロードも、上記ホームページより可能です。

「編纂所だより」は3月と9月の年2回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（3階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

（平成29年10月発行）